



子どもたちとワークショップをする中で感じたことから、探究的な場づくりのコツやファシリテーションのヒントを探ります。



考えるって
おもしろいかも!?

第39回

ELMSセンターはじめました!

心おどる探究をしよう!

どうも! ELMSセンターの鴨川です。2024年4月から、僕が所属するジャパンGEMSセンターは、ELMS (Exploratory Learning in Mathematics and Science: エルムズ) センターへとステップアップしました。細かい経緯は活動報告書などに書いてあるので割愛しますが、一番大きな変更はGEMSに限らずさまざまな探究プログラムにチャレンジできるようになったことです。

近年の探究ブームの中で、大人からしきりに探究やグループワークをけしかけられることにうんざりしている子が増えてきています。とはいえ、高校で新しい教科「理数探究」が誕生するなど、自然的・社会的な事象を科学の目で捉えられるようになっていくことが求められる今、思わずやりたくなるような科学、数学、そして環境の探究プログラムをたくさんつくっていききたいところです。

SCIEによる プログラムデザイン

僕が環境の探究プログラムをつくるときは、Science (科学) の略語SCIEになぞらえて Sustainable 持続可能性、Complexity 複雑性、Inclusive 包括性という3つの要素を大切に行っています。単純に特定の環境知識を伝えるのではなく、多様な環境領域や、健康や福祉、街づく

りなどさまざまな側面から包括的に考え、「誰ひとり取り残さない」問題解決の視点を育てることを目指すアプローチです。

僕は、探究学習の場は社会の縮図だと考えています。ただし、何度もトライ&エラーができるテスト環境のようなものです。子どもたちが安心してチャレンジできるように、子どもごとの特性を考慮し、それぞれの違いを活かしながら学びを広げたり、深めたりする関わり方(インクルーシブなファシリテーション)が欠かせません。

ELMSセンターが目指すのは、実際に社会で起きている複雑なジレンマに目を向けつつ、それについて考えることが嫌にならないような安心安全な学びの場づくり。子どもたちが考える楽しさに気づいていくと、きっと世界が変わっていくエネルギーになると信じています。



身近なものを「プラでできているとよいもの」「プラでなくてよいもの」「こんなにプラでなくてよいもの」に分類するアクティビティ。白黒思考ではなく、批判的な思考を使って分類する。

鴨川 光

(かもがわ ひかる)

1987年茨城県生まれ。ELMSセンター 主席研究員。早稲田大学大学院教育学研究科修了後、2013年6月より現職。子どもの思考力や社会性の発達について研究している。ワークショップやボランティアを通して子どもたちと一緒に成長中。

